一般研究　研究報告書　平成二十一年度

研究課題

唐・宋時代の越州窯

青磁、碗類の器形の変遷について

東京国立博物館研究員

三笠　景子

はじめに—大英博物館所蔵調査作品について—

無文碗（収蔵番号　1935,10.197）

浅く、直線的に開いた無文碗である。簡素な形で均整がとれている。器面外側にはうっすらと轆轤挽きの痕が見られる。口径一四・九、高さ三・八、高台径六・三センチメートルと小形であり、器壁は薄く鋭く挽き上げられているが、底が厚いため手にとるとずっしりと重みを感じる。

胎は灰色硬質で、全体に暗いオリーブグリーンの釉薬がかかっている。高台の形はいわゆる蛇の目（中国では玉璧と呼ぶ）である。二センチにも及ぶ幅広の畳付きは露胎で、削られた中央部分は施釉されている。畳付は茶色く焼けており、七～八個の剥離状の目跡がある。

この形式の碗は唐時代の白磁、青磁によく見られるもので、中国の南北において広く作られ、使われた器であった。朝鮮、日本にも将来されて、飲食文化のみならず製陶にも影響を及ぼした。日本出土の紀年資料では九七三年（天禄四）に焼失した薬師寺西僧坊跡から出土した玉縁の白磁碗が知られる。越窯系の青磁碗も北部九州や奈良、京都などから出土が確認されている。

蛇の目高台の碗をとりあげた研究は一九八九年（平成元）の和泉市久保惣記念美術館で開催された「飲器—杯・碗・托—」があり、生産年代に関する論考は一九九三年（平成五）刊行の『貿易陶磁研究』一三号掲載、亀井明徳「唐代玉璧高台の出現と消滅時期の考察」に詳しい。その後、越窯では上林湖畔の窯址の発掘調査が行なわれ、亀井氏の論考をおおよそ補う関連資料が見つかっている。

二〇〇二年に発表された越窯上林湖窯址の報告[i]では、七世紀後半～八世紀中葉に位置づけられる第三層から、九世紀後葉から一〇世紀初頭に位置づけられる第五層において、出土が確認できる。また上林湖の西に位置する白洋湖、杜湖の窯址でも唐時代中期の地層から出土が確認できる。上林湖南東に位置する銀錠湖畔の窯址で詳細な報告がなされた寺龍口窯址出土資料[ii]では、呉越国時代早～中期に位置づけられる地層からA型Ⅰ式、Ⅱ式という分類がなされた蛇の目高台碗の出土が確認できる。

貴人墓発掘報告では、もっとも早い時期のものとしては、七六三年（宝応二）に亡くなった鄧俊の墓から出土した白磁碗や、七六四年（広徳二）に亡くなり、七七八年（大暦一三）に埋葬された鄭洵の墓から出土した白磁碗がある[iii]。越窯の青磁は、諸暨貞元一〇年（七九四）の墓出土品が初見と考えられている。

ただし、亀井氏の論考以降[iv]、窯址発掘調査がなされたとはいえ、細かい器形の変遷を追うにはまだ紀年資料に乏しい。近年窯址発掘調査の進んでいる韓国における出土傾向も合わせて、中国、韓国、日本のより広い視点で再考する必要があり、今後の課題としたい。よってここでこの碗の生産時期を特定するのは難しいが、器壁が薄く、口縁が鋭い点で、高度な生産技術がうかがえる。これは晩唐の法門寺塔出土の「秘色」青磁の造形に通じるように思われる。実見したことはないが、八四八年（大中二）の銘を持つ碗が出土した寧波和義路遺跡[v]の出土品のなかに発見された蛇の目高台碗などに近いのではないであろうか。この遺跡出土品は、当時の主要貿易港であった明州（現寧波）から諸外国へ運ばれる貿易陶磁としての様相を示す好資料であり、輪高台や輪花形、印花技法や刻花技法の装飾が施された越窯青磁が蛇の目高台碗と共伴して出土したことでも知られる。

ちなみに、この作品は一九三五年一〇月に大英博物館の収蔵となった。伝えるところによれば、日本の陶磁研究者中尾万三から大英博物館のロバート・ホブソンに送られたものである。中尾は一九三〇年（昭和五）に飼田万太郎に命じて上林湖畔を調査し、越窯址を発見した人物である。一方、イギリスにおける中国陶磁研究の第一人者であったホブソンは、一九二九年（昭和四）に陶磁蒐集家のオスカー・ラファエルや同僚のローレンス・ビニョンらとともに、さらに三五年（昭和一〇）にもロンドン・ロイヤル・アカデミー・オブ・アーツで開催された「中国芸術国際展覧会」（三五年一一月～三六年三月）[vi]の準備のために訪日しており、その際に中尾とも往交があったと推測される。研究草創期におけるイギリスと日本の交流をうかがわせる興味深い資料である。

大英博物館には中尾が寄贈した陶片資料も保管されており、今回調査させていただいた。詳細は省略するが、それらは越窯および龍泉窯採集品と思われるものである。

龍涛文碗（収蔵番号　PDF246）

やや深めの素直な碗形である。器胎には製作時に生じるような凹凸や歪みはまったくなく、整った姿である。高台畳付きは細く丸く丁寧に削られている。口径一四・五、高さ六・三、高台径五・三センチメートルと小形で、すっぽりと片手に収まる大きさで手にとるとふわっと軽い。

胎は灰色硬質で、釉薬も灰色を帯びた青色である。胎に吸い付くように薄くかかっていて、むらがない。総体に施釉してあり、高台の内側に白い付着物の目跡が環状に見られる。

線刻による文様が器内外の全体に施されている。見込みには玉をはさんで向かい合うマカラ（摩羯）の姿があらわされ、その周辺および器の外面全体に波涛文があらわされる。マカラや波涛は、輪郭を外側から深く彫って陰影をつけた表現である。細部はいずれもきわめて繊細な毛彫りである。文様は口縁の際近くまで施されており、内外に一本の圏線が引かれている。

口縁には金属の覆輪がかけられている。銀製かと思われるがほとんど錆びている。外側に浅く、内側に深くかけられている。後述の通り、「金銀飾」の器が呉越国から北宋王朝に納められていたことは呉越国時代の記録を掲載した文献資料に知られる。

以上の特徴から、この碗は一〇世紀後半から一一世紀初頭にかけて、越窯で生産されたものと考えられる。前掲の寺龍口窯址出土資料に照らし合わせると、まったく同じ装飾が施された資料は見出せなかったが、形は呉越国晩期～北宋初期の碗類の形式とほぼ同じである。また、やや低めの輪高台で畳付きが丸く削られた同じ特徴をそなえる陶片は、根津美術館に収蔵されている「太平戊寅」銘の陶片資料やエジプト・フスタット採集の出光美術館所蔵の陶片資料のなかにもいくつかみとめられる。この碗には銘は施されないが、丁寧な作りであることや金属の覆輪がかけられていることから、北宋王朝に収めるために作られた高級品であったと推測される。

この作品はパーシヴァル・デヴィッドのコレクションの一つで、現在は大英博物館に収蔵されている。一九三四年に刊行されたホブソン編纂によるデヴィッド・コレクションのカタログに掲載されており、また前述の「中国芸術国際展覧会」にも宋代初期の越窯として出品された。越窯の優品としてきわめて早い時期から世に知られていた作品である。

鳳凰文盤（収蔵番号　19477 1246）

径一八・三、高さ五・六、高台径一一・一センチメートルと小形の盤である。この作品も器胎に凹凸や歪みがなく、きわめて丁寧に製作されたものであることがわかる。器面外側に浮彫り風の蓮弁文があらわされる。輪郭は単純に深く彫ったもので、刃を斜めから入れるいわゆる片切り彫りではないが、蓮弁の中央に稜が立っていてより立体的にあらわされている。高台は撥状に開いて立つ。底面が厚いため、手にとるとそれなりの重みがある。

胎は灰色硬質で、釉薬はオリーブグリーンを呈している。ややむらがあり、釉薬のたまった箇所はガラス質である。総体に施釉してあり、高台内には支釘の剥離痕が九～一〇個、環状に残る。

見込みには線刻により、鳳凰文が施されている。きわめて精緻な毛彫りの文様である。また、口縁外側に唐草文が一周する。高台内中央に「永」字銘が刻まれている。

撥状高台を持ち、高台内の中央に刻銘が施された盤は寺龍口窯址出土資料の呉越国晩期～北宋初期の層から出土が確認できる。同じ「永」字銘を持つ作品には、遼の韓佚夫婦合葬墓[vii]（韓佚の埋葬年は九九七年、夫人の埋葬年は一〇一一年）から出土した人物文水注がある。刻銘のある陶片は一九三〇年代における上林湖窯の一連の調査によって見出され、「太平戊寅」銘の陶片は、それが太平興国三年（九七八）にあたることから年紀の明らかな資料として注目を集めた[viii]。上林湖窯址

発掘調査では、刻銘のある陶片は圧倒的な割合で発見されており、「永」字のほか、「大」「上」「天」「吉」「辛」「千」「供」「子」「内」「丁」「乙」「己」等の刻銘が確認されている[ix]。

この盤は一九四七年七月、収集家ヘンリー・オッペンハイムが大英博物館に寄贈したものである。まったく同形の作品がデヴィッド・コレクションにも一点ある。デヴィッド・コレクションの盤は例のごとく一九三〇年代より世に知られており、一九八〇年(昭和五五)に開催された「英国デヴィッド・コレクション中国陶磁展」において日本でも紹介されている。

青磁六輪花鉢（収蔵番号　192012111）

この作品は越窯の製品ではないが、かねてより碗類の変遷をたどるうえで鍵になる作品と考えていたので、調査を希望したものである。

口径二四・五、高さ七・八、高台径七・三センチメートルの大型の鉢である。胎は薄いが、高台部分がやや厚めであり、手にとると重みを感じる。口縁を六弁の輪花形に作り、器壁の外側に輪花に沿って縦に刻みを入れている。全体に大きく割れたのを一度鋸で修理した後、鋸を外して接着し直した痕跡がある。

胎は硬質できわめて白い。底部は低く細い輪高台で、全体に施釉されているが、畳付き部分を削って釉薬を剥いでいる。釉はいわゆる砧のような美しい青磁釉で、ほとんどムラが無い。貫入と呼ばれるヒビが所々にみとめられるが、均一ではない。口縁近くに細かく見られたり、中央部分に大きく走っていたり、部分的に偏りがある。

この鉢は蒐集家のウィリアム・アレキサンダーが所蔵していたことから「アレキサンダー・ボール」と呼ばれている作品である。大英博物館には一九二〇年に収蔵された。

興味深い点は口径が二〇センチメートルを超える大きさとこの形を持つ無文の青磁鉢は、越窯にはない器種であることである。大英博物館の前掲二点の越窯青磁の大きな特徴として挙げられるのは、二点とも小ぶりであるということである。根津美術館に所蔵されている六〇片の陶片資料は、高台部分を中心に集められたものであるが、それらを調査した結果、おおよそ高台の大きさに規格があることもわかっている。また、南宋時代早期まで生産活動が確認されている寺龍口窯址出土資料では、最末期の南宋早期の層から輪花形のやや大きめの碗類の出土が報告されているが、口縁が外反していたり、高台からの立ち上がりがより直線的であったり、そして口径は二〇センチメートルを超えるものはない。基本的にアレキサンダー・ボールの種類とは異なるものである。

そしてこの輪花形の鉢は、北宋時代の定窯や磁州窯、鈞窯のほか、青磁窯のいくつかにおいても類例が確認されており、宋時代にはひろく需要のあった器であったことがわかる。アレキサンダー・ボールの生産窯については、大英博物館では河南省汝州市に発見された張公巷の製品と位置づけている。張公巷の発掘調査は二〇〇〇年から二〇〇一年にかけて河南省文物考古研究所によって行なわれており[x]、その調査範囲は十分とは言い難いが、先に調査が進んでいた宝豊県清涼寺窯址の出土資料との比較から、より質の高い青磁を生産した張公巷を北宋官窯と考える説もある。

筆者はこの鉢は、胎と釉薬の特徴から宋時代に華北において作られたものと考えるが、詳しい生産窯の断定は現状では難しいと考える。しかし前述の通り、類例が多い器種であるため、青磁のみならず、華北、南方諸窯の製品を含めて出土資料や博物館・美術館所蔵品を丁寧に洗い出し、変遷をたどることは可能であると思われる。

ちなみに、東京国立博物館には南宋官窯と考えられる重要文化財の青磁輪花鉢（収蔵番号TG1234）が所蔵されている。一九三七年（昭和一二）に横河民輔によって博物館に寄贈された。この鉢については二〇〇七年刊行『MUSEUM』第六〇九号[xi]にとりあげたことがある。ここではアレキサンダー・ボールとの比較のみ簡単に記しておく。

横河コレクションの鉢は口径二六・一、高さ九・一、底径七・一センチメートルで、アレキサンダー・ボールよりわずかに大きい。薄づくりで、輪花に沿って外面に刻みを入れている点や、焼きひずみで少し傾いている点など、両作品はとてもよく似ている。異なる点は、横河コレクションの鉢はそ

の最大の特徴である貫入が器面全体にわたって走っている点である。氷裂と呼ばれる細かいガラスのヒビはほかのどの作品とも比較にならない独特の美しさを生み出している。釉調もアレキサンダー・ボールに比べてガラス質で透明度が高いように思われる。また、両作品とも薄づくりではあるが、横河コレクションの鉢のほうがより薄く、手に持った印象もより軽い。とにかく薄く作りあげようという陶工の意識が強く感じられるのである。

そしてもう一点、南宋官窯と考えられる輪花鉢が台北の国立故宮博物院に所蔵されている。機会を得て今年度調査することができたので、アレキサンダー・ボールとの比較をここに記しておきたい。

台北故宮の鉢（収蔵番号 故瓷 08821）は口径二三・一、高さ八・八、高台径六・一センチメートルである。形、大きさはほかの二点によく似ている。手にとると、横河コレクションの鉢よりも厚手という印象があった。

胎は硬質、灰黒色で、釉調はマットである。貫入は全体的に大きく走る特徴があり、内面のほうが外面よりも少ないようである。いわゆる氷裂は見られない。高台内にも施釉してあるが、畳付きは打ちかいたような痕跡が見られた。アレキサンダー・ボールや横河コレクションの鉢と共通しているのは、ややひずんで傾いている点と、輪花に沿って外面に刻みを入れている点である。

これら三点を実見して思うことは、同じような青磁を作るという一つの傾向はみとめられるものの、いずれも異なる窯で作られたものであろうということである。横河コレクションと台北故宮博物院の鉢は、それぞれの特徴から南宋時代に杭州周辺の窯で作られたものと推測されるが、これら二点が同じ窯の製品とは考え難い。そして、この器形は宋磁を代表する形として注目すべきものであり、今後ほかの窯の製品を含めて考察を深めたいと思う。

越窯研究の歴史を振返る

イギリスでの調査を行なう前に、イギリスにおける中国陶磁研究の歴史について調べる機会があった。筆者は越窯に関する研究史を簡単ではあるがまとめたことがあるので、あわせてここに報告しておく。

唐から宋時代にかけて、現在の浙江省北部を中心にすぐれた青磁を生産した越窯は、陶磁器の発展の歴史において先駆的な位置づけにある窯であり、官窯を含め、宋時代に開花する青磁の展開を知るうえで、手がかりとなる重要な窯である。

文献に語られたその歴史はきわめて華やかである[xii]。『茶賦』は八世紀半ば、唐七代粛宗の頃の人と伝わる顧況によって著されたもので、そこには「越泥似玉之甌」とある。同時代の孟郊の詩「馮周況先輩於朝賢乞茶」には「越甌荷葉空」とある。「越甌」とはいずれも茶を飲む器を指しており、玉にたとえるなどその美しさが称えられている。

陸羽は『茶経』において「盌、越州上、鼎州次、婺州次、岳州次、寿州次、洪州次。或者以邢州処越州上、殊為不然。邢瓷類銀、越瓷類玉、邢不如越一也。若邢瓷類雪、則越瓷類冰、邢不如越二也。邢瓷白而茶色丹、越瓷青而茶色緑、邢不如越三也。・・・」と述べた。後世、この当時の陶磁器生産を「南青北白」と呼ぶようになったように、越州の碗を華北の邢州の白磁と並んで喫茶茶碗の首座に位置づけ、その様子は玉のようでも氷のようでもあり、茶を注げば青の美しさが増したというのである。

続く九世紀においても人気はますます勢いを得て、皮日休や鄭谷、韓偓といった文人たちが競ってその美しさを玉に譬え、越窯の碗で茶を喫することの喜びを詩に詠んだ。

皮日休「邢客與越人、皆能造瓷器。圓似月魂墮、軽如雲魄起・・・」

鄭谷「篋重蔵呉畫、茶新換越甌・・・」

韓偓「越甌犀液發茶香・・・」

さらに、この頃詠まれた詩には、越窯青磁の釉薬の美しさを称える傾向がみとめられる。一九代昭宗の頃の人、徐夤の詩『貢餘秘色茶盌』には「捩翠融青瑞色新、陶成先得貢吾君・・・」とあり、晩唐の陸亀蒙の詩『秘色越器詩』では「九秋風露越窯開、奪得千峯翠色来・・・」とある。以上から、

磁が「秘色」[xiii]と呼ばれていたことがわかる。

五代から宋にかけての越窯に関しては、『冊府元亀』、『宋史』、『太平寰宇記』、『元豊九域記』、『宋会要輯稿』、『呉越備史補遺』、『楓窓小牘』など貢磁に関する記録のある文献に明らかである。『呉越備史補遺』の記述によれば、呉越国が北宋に降る太平興国三年（九七八）その年まで、金銀の覆輪と推測される「金銀飾」の器を多数北宋王朝へ納めている。また周密の『志雅堂雑鈔』のように越窯に官吏が派遣されたという記録ものこる。

いま越窯に関する研究の歴史を振返ってみると、その歴史もまた、華やかである。呉越国の崩壊とともに表舞台から姿を消した越窯は、南宋時代にはすでに幻の窯となり、文献において「秘色」という魅力的な言葉でのみ語り継がれ、後世の人々の心をとらえ続けた。

二〇世紀に入ると、イギリスやアメリカ、ドイツ、日本などを中心に本格的な中国陶磁研究は進められたが、文献資料が数多くのこされてきた越窯は、その当初から中心的な研究対象であった。

しかし、はたしてどのようなものが越窯青磁であるのか、それが官窯や汝窯や哥窯といった青磁とどのように異なるのか、それは長い間わからないままであった。たとえば、一九一〇年にバーリントンハウスで開催された展覧会Early Chinese Pottery and Porcelain[xiv]は、漢時代から明時代までの陶磁器が出品されたもので、明時代以前の陶磁器に本格的に注目が集まるきっかけになった重要な展覧会であったが、この図録にはイギリスの著名な陶磁蒐集家ジョージ・ユーモルフォプロスが出品した越窯青磁と思われる蓮弁文の壺が「哥窯の可能性がある作品」として掲載されているのである。

一九三〇年（昭和五）、前述のとおり、中尾万三によって上林湖畔に窯址が発見されると、越窯研究は大きく進展する。ロンドンで開催された「中国芸術国際展覧会」では稀代の中国陶磁蒐集家パーシヴァル・デヴィッド所蔵品など合わせて六点の名品が世に公開された。

戦後、五〇年代より中国では考古学的な発掘調査が進められ、日本では「古越州」「古越磁」と呼ばれて親しまれている六朝時代の徳清窯址[xv]や上林湖周辺に広がったいくつもの窯址の発掘報告[xvi]がなされ、越窯の広汎な性格が窯址からもあきらかになった。

日本国内における研究動向については、小山冨士夫が一九五二年（昭和二七）に大宰府鴻臚館の出土品（中山平次郎採集）のなかから越窯青磁の陶片を六件発見したことに始まる。続いて五四年には、大宰府から約六〇〇点の越窯青磁の出土が確認される[xvii]。こうして越窯青磁の日本への貿易陶磁としての面が提示されたのである。貿易陶磁としての越窯は一九一〇年以降、欧米の研究者らを中心にエジプトのフスタット、ペルシャ湾岸のサマラやシーラーフ、ホルムズといった貿易港、そしてインドなど各地の遺跡で出土した陶片の調査がさかんに行なわれており、その存在は早くから指摘されていた[xviii]。しかし日本において本格的に貿易陶磁研究が進むのは、一九七〇年代高度経済成長期に集中的におこなわれた国土開発にともなって、発掘調査がさかんになってからのことである。

一九七〇～八〇年代には、いわゆる臨安五代墓など呉越国銭氏にまつわる貴人墓[xix]の発掘や、八六年陝西省扶風県法門寺塔地宮から見つかったいわゆる「秘色」青磁の発見[xx]が続いた。そして越窯研究は、大規模な国際学会が開かれたり、重要窯址の出土資料が報告されたりした九〇年代から二〇〇〇年代にかけて盛時を迎えたのである。

とくに、一九九八年から本格的な発掘調査が行われた浙江省慈渓市の寺龍口窯址の出土資料によって、おおよそ晩唐から南宋早期の越窯の生産活動の展開があきらかとなった。本格的な窯址調査報告が乏しい越窯研究において、この寺龍口窯址は重要な発見の一つであったといえる。

しかし、その後官窯青磁に関する研究に注目が集まり、越窯は議論の俎上にのることがほとんどなくなったのが現状である。

おわりに

一九二四年に東洋陶磁研究所が設立されて、日本における東洋陶磁研究が本格化してもうすぐ

一世紀を迎える。つまり、研究史を振返るにあたり、越窯はその基軸となるということである。

今回調査を行なった無文蛇の目高台碗は、薄く軽快な造形表現に新しい時代の萌芽が感じられた。続く呉越国のもとで作られた越窯青磁二点は線彫りや透彫りの装飾にすぐれていた。線彫りであらわされた龍や鳳凰、植物のにぎやかで魅力的な文様は、晩唐の金銀器との関連性が指摘でき、輪花や撥状高台などそれまでには見られなかった新しい器種器形も金銀器の影響を強く受けたものと考えられる。そして呉越国においてこの線刻文様は単なる装飾ではなく、特定の人々に伝えるべく刻まれたものであり、時代の移行期において重要な役割を担っていたと推測される。しかし毛彫りのきわめて繊細な装飾は、じつは釉の美しさが重要となる青磁には不向きの装飾ではないかと筆者は考えている[xxi]。それは今回合わせて調査することができたアレキサンダー・ボールと類似する横河コレクション、台北故宮所蔵品の造形感覚を見ればあきらかである。釉面を大きく見せ、いかに釉薬が美しいかということに力点が置かれているのである。こうしてみると、越窯青磁は唐磁であり、いっぽうで他窯に先駆けて陶磁器の造形に新たな扉を開いた「宋磁」でもあり、「移行期」を示す興味深いやきものといえる。

---

i 『上林湖越窯』慈渓市博物館編、科学出版社、二〇〇二年。

ii 『寺龍口越窯址』浙江省文物考古研究所、北京大学考古文博学院、慈渓市文物管理委員会、文物出版社、二〇〇二年。

iii 「河南偃師杏園村唐墓的発掘」中国社会科学院考古研究所河南二隊、『考古』一九九六年第十二期。

iv 森達也「唐代晩期越州窯青磁碗の二つの碗の系譜—玉壁高台碗と輪高台碗—」『金大考古』第三四号、金沢大学、二〇〇〇年がある。

v 寧波市文物考古所「浙江省寧波和義路遺址発掘報告」『東方文物』杭州大学出版社、一九九七年。

vi Catalogue of the International Exhibition of Chinese Art, Royal Academy of Arts, London, 1935-36

vii 「遼韓佚墓発掘報告」北京市文物工作隊『考古学報』、一九八四年第三期。

viii 松村雄蔵「西湖陶話」『陶磁』第七巻五号、東洋陶磁研究所、三五～三七頁。

ix 前掲『上林湖越窯』二〇六頁。

x 『汝窯和張公巷窯出土瓷器』河南省文物考古研究所、科学出版社、二〇〇八年。

xi 拙稿「南宋官窯青磁再考—東京国立博物館所蔵重要文化財《青磁輪花鉢》の位置づけをめぐって—」『MUSEUM』第六〇九号、東京国立博物館、二〇〇七年。

xii 以降古文献にある越窯の歴史については、二〇〇五年に刊行された慶應義塾大学大学院生論文集所収の拙稿「越州窯青磁、解明への一世紀」を参照されたい。

xiii 「秘色」本来の意味については長谷部楽爾「秘色拾収」(『常盤山文庫中国陶磁研究会会報1米色青磁』二〇〇八年)に詳しい。

xiv Exhibition of Early Chinese Porcelain and Pottery, Burlington Fine Arts Club, London,1911

xv 「徳清窯瓷器」浙江省文物管理委員会、『文物』一九五九年第一二期。

xvi 「浙江余姚青瓷窯址調査報告」金祖明、『考古学報』一九五九年第三期。

xvii 亀井明徳『日本貿易陶磁史の研究』、同朋舎出版、一九八六年一一月、五一頁。

xviii 「埃及フォスタット出土の越州窯」、「波斯サマラ出土の越州窯」、「印度ブラミナバッド出土の越州窯」、小山富士夫『支那青磁史稿』文中堂、一九四三年、一二六～一五五頁。

xix 「杭州、臨安五代墓中的天文図和秘色瓷」浙江省文物管理委員会、『考古』一九七五年第三期。
「浙江臨安板橋的五代墓」浙江省文物管理委員会、『文物』一九七五年第八期。
「浙江臨安晩唐銭寛墓出土天文図及官字款白瓷」浙江省博物館、杭州市文管会、『文物』一九七九年第一二期。

「江蘇邗江蔡庄五代墓清理簡報」揚州博物館、『文物』一九八〇年第八期。
「蘇州七子山五代墓発掘簡報」蘇州文管会、吳県文管会、『文物』一九八一年第二期。
「杭州三台五代墓」浙江省文物考古所、『考古』一九八四年第一一期。
『法門寺考古発掘報告（上）（下）』文物出版社、二〇〇七年。
拙稿「唐宋時代の越窯と金銀器—線刻装飾を施した呉越国「秘色窯」の青磁」『アジア遊学東アジアをめぐる金属工芸』一三四号、勉誠出版、二〇一〇年。

xxi xx